

### 13 番テーブル：5<sup>th</sup> C++テーブル総評



ジャッジ：新谷（青学4年）、永江（上智4年）

#### 〈順位〉

- 1 位：寺内（早稲田3）
- 2 位：山田（武蔵3）
- 3 位：永田（明学3）
- 4 位：陸（立教2）
- 5 位：山田（慶應2）
- 6 位：石井（青学2）

〈議論の流れ〉（文責：上智大学4年 永江）

#### ◆ナローイング～

寺内がナローイングを読み上げると、山田（も）が「J/G のタスクである 'make situation better (以下 msb)' とはナロープレゼンターが言っている内容のみを指すのか。他のタスクも認めるのか？」と質問し、自らのアイデアを検証するためのプロシージャを示した。永田と寺内の質問によりそのプロシージャの目的がサジェスションの類であることが判明したため山田（も）の話を聞いてみると、その内容は「複数のタスクを比較して、もっとも 'contribution' を高められるものを選びたい。このタスクの選定を欠くと AD をとるのは困難」とのこと。そこから msb が contribution を包含するのか否か(包含されていれば山田（も）の contribution についてのアイデアは通常のコンパリの一端として処理できるため

か)で多少揉めたが、永田が山田（も）とナロープレゼンターである寺内のタスクへのスタンスが合致していないことを明確にしたおかげで「山田のタスクコンパリをするかどうか」を決める投票に持ち込むことが出来た。方法論として投票を先に提示したのは山田（は）であったが一度目は通らず、陸の質問で明瞭になった「アゲコンかどうかはエビデンスや憲法の文面からの判断ではなく、バリューによって決める」ということをふまえて再度投票を勧めた寺内のサジェスションが最終的に投票に踏み切る要因となった。結果的には山田（も）が提示したタスクコンパリは行わないこととなったが、「against constitution(以下アゲコン)についてどうしても話したい」という山田（も）の意向を救済すべく話を深掘っていくと山田（も）のアイデアの根底には「AD>DA だけどアゲコン、という結果になるのが不本意」という思いがあることがわかった。なににせよ山田（も）のアイデアはナローイングでは検証余地なしとテーブルで合意がとれたため、山田（も）はこれについて solution かコンパリで再度提示するという事でナローイングは終了。

#### ◆オピニオンプレゼンター決め～

オピニオンプレゼンターには山田（は）と寺内が立候補した。二人のシートは以下の通り。

山田（は）：テーマは臓器移植。モデルオピシ。コンパリの主な論点は TG の 'emergency'  
寺内：テーマは臓器移植。モデルオピシ。コンパリが TG, QL, QT の 3 つではなく moral, risk, emergency など 3impact の外でクライテリアを設置してコンパリを行う。

しばらく各々のシートへのイメージを明らかにしようとする質問が続く。山田（は）のシートでは山田（も）の持つアゲコンについての話はコンパリでできると判明。寺内のシートの狙いは先述の複数のクライテリアのいずれかではなく、「なるべく多くの論点を話すこと」だった。投票は一時引き分けとなったが、結果としては山田（は）がオピニオンプレゼンターに決定。

#### ◆Problem～

Problem は特に論点なし。Harm は、「延命力を理由に TG が人間由来の臓器を欲している」という設定。永田の質問を発端に「ここでいう病気は身体の痛みを感じるものなのか否か」「TG は現時点で medical treatment を受けているのか否か」という論点が出たが、陸の介入によって「TG のもつ病気は痛みを感じるもの。Medical treatment は受けていない」と harm の詳細を決定するに至った。次いで石井が「TG が臓器移植を必要とするような病気を抱えた原因が自業自得な出来事だった場合（信号無視による交通事故や糖尿病など）も含めるのか」と問うと、それに対する山田（は）の返答は「含めて良し」。山田（は）は続けて石井に何かアイデアがあるのなら NFC で出すようにと告げる。紆余曲折を経て判明した S/M の設定は以下の通り。

1. 臓器移植の「成功」は、「現段階で TG が抱えている病気が治ること」

2. *Rsn for will* は「死に対する恐怖」
3. (陸&寺内の *Q*) 臓器移植を行えば同時に「*TG* が抱えていた病気は治った」とみなす (タイムラグや臓器移植の拒絶反応などは考慮しない)
4. (陸の *Q*) *Term of S/M* は定義しない

#### ◆SOH～

石井がオリジナルの SOH ロジックに対し「*TG* の *against wil*(以下 *A/W*)は自らの'*bad action*'から発生しているので自業自得。そして×*serious*」と反論。石井の反論について判明した要素は以下に記す。

1. (寺内の *Q*) *TG* が *bad action* をしたかどうかは医者や警察の調査で判断する
2. (山田 (は) の *Q*) 生まれつき臓器疾患を抱えている人は *serious* とみなしてよい
3. 石井の *Goal* は *narrowing TG (bad action* で臓器移植を求めている人は排除)
4. 自業自得で臓器疾患を抱えている人を *TG* に含むと、その人たちを助けている間に罪のない *TG (bad action* をしていない *TG*) が死んでしまう恐れがある

→寺内が「それは *DA* か」と問うたところ、石井は *DA* に近いものだと返答。反論は結果的に *SOH* を崩すものとはならず、石井の反論は *DA* として流された。

#### ◆Cause～

脳死の定義は以下に記す。

1. 脳死は「心臓が動作し、脳幹が機能停止している状態」(*SQ* の医学的定義と同義)
2. (陸の *Q*) オピニオンプレゼンターにとって脳死はあくまで「脳死」であり、生死のどちらにも分類されない
3. (陸の *Q*) 脳死者を臓器摘出の対象に選んだ理由は、
  - ① 死人よりも臓器の状態が新鮮だから②数多く臓器を摘出することができるから、の二つの理由。

#### ◆Mandate～

マンドートでは、臓器摘出の対象は生きている人と脳死者の両方。

※生者から摘出できるのは、*SQ* で認可されている肝臓 (*liver*)・腎臓(*kidney*)・膵臓 (*pancreas*) のみで、*APA* でも提供に同意しているドナーからしかとらない。生者からとれない種類の臓器を脳死者から摘出することで全臓器をコンプリートする。

#### ◆Practicability～

山田 (も) がオリジナルのプラカロジックに反論。内容は「今回の *Mandate* は'*killing*'であり、殺人はアゲコンでかつ脳死者に対して *forcement* を行っている。そのため *J/G* が

power to take plan を持たない」。

1. (寺内の Q) 脳死チェックの最初の脳死判定テストの段階から **killing** とみなす
2. (山田 (は) の Q) **killing** の意味は「脳死チェックテスト強制」と「臓器提供強制」の二つ
3. (山田 (は) の Q) アゲコンと×プラカのつながりは山田 (も) にとって自明の理。むしろなぜつながらないのかはオピニオンプレゼンターが立証する必要があるというスタンスを山田 (み) は持っていた。
4. (永田の Q) 「アゲコン」とは、「デメリット>メリット」の意。
5. 山田 (も) の目的は、ここでデメリットとメリットをコンパリしてプラカを保留しておくこと (ナローイングの項を参照のこと。アゲコンでも **T/Plan** という状況を恐れているためこの **goal** になったかと思われる)

→永田が本来のプラカのタスクと山田 (も) の主張するタスクの齟齬をカンファメし、山田 (も) の話は後回しにするということでテーブルの合意を得る。次いで山田 (は) がそれに対する方法論を追加。「①プラカを通常通り検証→(従来のコンパリ) →②アゲコンかどうか検証→③アゲコンかどうか **msb** につながるか検証」という形でいわゆる **new area** の設置を試みることを宣言し、皆の同意を得た。

次に永田がプラカに反論。内容は「脳死者に臓器提供強制をしたら **J/G** の信用が落ちるから×**T/Plan**」というもの。Goal は **counter plan** で法を施行するために多くの日本国民の賛成を得るステップを加えるということだった。(※マンドートの追加は **spike plan** です。しかしここでは永田のアイデアの全貌が明らかにならなかったため依然として詳細は不明)

1. (寺内の Q) 日本国民の信用低下を確認する方法は、「国民の法改正への反対数が過半数を占めているかどうか」。**SQ** ではドナーになることに賛成する人が国民の 46%、反対する人が 47%、ほか 7%は不明という意識調査のエビデンスがある。

→(寺内の Q) **SQ** で反対している 47%の国民が **APA** でも反対の意を示すかどうかは定かでない以上、このエビデンスを用いてプラカを否定することはかなわないと指摘。永田はこの指摘に従い、**situation comparison** でナチズム的政治の是非を問いたいと意思表示し、この反論は流れた。

#### ◆Workability～

山田 (も) が反論。「臓器提供意思がないのに提供強制を強行するのは **WHO** が禁止している。よって脳死者の賛成なしに臓器摘出できない」という内容。**WHO** の協定を批准することにより得られる **WHO** のサポートとはいったい何かと寺内と山田 (は) が掘り下げている最中に時間切れ。

〈順位と選定理由〉(文責：青山学院大学4年 新谷)

#### 1 位 寺内（早稲田3）

オピニオンプレゼンターでなかったものの、**Q**、**C**、**S** 全て積極的に行なっていた点を評価しました。タスクを使うだけでなく、自分の目指すディスカッションを実現しようとする姿勢が見えてよかったと思います。しかし、議論の前半の発言量が少なかったので、3時間を通してコンスタントに介入できるとより良いのではないかと思います。個人的に、小セミの最後のテーブルもジャッジしましたが、その時よりもレベルアップしていることを感じ、よかったです。

#### 2 位 山田（武蔵3）

オピニオンプレゼンターを務めたこと、積極的な **Q**、**C** の姿勢を評価しました。正直、1位との差は非常に僅差でした。基本的な **Q**、**C** の質は高いと感じたので、議論の初めから最後まで介入し続けられると良いのではないかと思います。また、介入量の少なさに伴い、少し推進力に欠けていたと感じたので、議論を前に進める術を身につけるとより良くなると思います。

#### 3 位 永田（明学3）

積極的な **Q** とアイデアを出した点を評価しました。発言量は上位2人に劣らなかったのですが、少し差が開いてしまいました。その理由は **C** の少なさでした。山田くんと同様、**Q**、**C** の質は高いと思います。**S** も打つ力はあると感じました。あとはそれを議論の中でコンスタントに発揮するだけです。個人的には永田くんも、試ジャッジ初期にジャッジした時より格段にレベルアップしていることを感じ、よかったです。

以上3人に共通して足りない姿勢・技術は、推進力、そして1人で **S** を通しきる力だと私は思いました。これからでも十分身に付けられる素質はあると思うので、ぜひ改善してみてください。

#### 4 位 陸（立教2）

ASQ での積極的な **Q** の姿勢を評価しました。オピメのアイデアを **Q** で詰めていく姿勢はとてもよかったです。しかし、他人のアイデアへの介入がほぼなくそれがこの結果に繋がりました。上位3人は3年生で質も高く、介入が難しかったと思いますが、まずは **Q** からでも介入してみてください。

#### 5 位 山田（慶應2）

アイデアを出した点と **C** を評価しました。特に、テーブルにたくさんアイデアを持ってきていたことは、とてもよかったと思います。次は、自分のアイデアを話すときは常

に自分が話を回せると良いと思います。

#### 6 位 石井（青学2）

Q とアイデアを評価しました。ただ、介入量が少なかったです。発言した時の質は高いと感じたので、量で負けてしまうのはもったいないです。ガッツもあると思うので、次に期待しています。

新谷：みなさん春セミお疲れ様でした。6 人とも、きっと自分が目標としていたテーブルではなかったのだと思います。しかし、最後まで全員諦めず議論に参加していて良いテーブルだったと思います。

3 年生は、まだアッセンがあります。3 人とも十分にランカーを狙える素質があると思います。ぜひ引き続き努力を惜まず、自分の目指すものに向かって頑張ってください。私は、君たちの真摯にディスカッションに向かう姿勢は評価されるべきものだと思います。アッセンに期待しています。

2 年生は、まずこのテーブルにいることを自信に思ってください。それに、誰も完全地蔵ではなく、各々の思う方向で頑張っていました。誇ってください。次は悔しさを感じることはないよう、また目標に向かって頑張ってください。

少し偉そうに書いてしまいましたが、みんなよりも少しだけ長くディスカッションに携わっている者のただのアドバイスです。

また、アッセンで成長した姿を見られることを期待しています。

永江：たいてい C++ テーブルというのは 2 カンだろうと 2, 3 年入り混じってしようと争乱になるものなのですが、各々理性的に議論を展開していたのが好印象でした。ただ 1 位以外のメンバーは介入量にむらがあってそれで 1 位を逃していたのももったいなかったですね。特に 3 年生にとって C++ テーブルは春セミでランクを獲れなかった悔しさを最後のアッセンに繋げるための関門であり、せめてここで 1 位になることが至らなかった自らへのけじめとなるはずなので、それを考えると motto 意地を爆発させてほしかったかなという思いもあります。

思考を止めずに丁寧に内容を深掘り、協力しながら着地点を模索する能力はみんなランカーにも負けていません。ただスピードだけは足りない。あのゆっくり加減であれだけのアーギュを流していたら気になる論点をたくさん出したはいいけど結局そのどれも話しきらずに終わってしまう虚しい結果になってしまい、今回もそうだったわけです。アーギュを流すだけでは何も話したことにならないということは重々理解しておいてください。なぜなら「ここでこれ話そうね」はただの目次づくりだからです。教科書でいうと最初の 3 ページくらい。目次だけじゃ誰のためにもならないぞ。

2 カンを逃した 2 年生と D・を逃した 3 年生、悔しさをかみしめた 5th だったと思います。  
「勝負は時の運」というから過剰に自信を失くす必要もない、君たちはよく頑張っていた。  
悔しければ自分が憧れた結果をつかみ取った人が持っているものと自分が持っていないもの  
のを分析して次の下剋上を心に秘め、時の運にさえ打ち勝つ力を蓄えよう。まだまだ伸びる  
ぞ、あとちょっと踏ん張って夏に笑おう。